Fall 2002

學 NEWSLETTER

THE CENTER FOR JAPANESE STUDIES • UNIVERSITY OF MICHIGAN

所長ご挨拶

新所長として、先ずは新しい学年度を迎えるに当たり、皆様にご挨拶申し上げます。

殿村ひとみ前所長は現在、東京でサバティカルをお過ごしですが、過去6年にわたってCJSを精力的かつ入念に導いて来られました。これまでの献身的なご尽力に深く感謝申し上げます。また**ホィットモア・グレー、ロジャー・ハケット、ウィリアム・マルム、ゲイル・ネス、ハロルド・スティーブンソン、竹下譲**の6名のCJS名誉教員の方々にも感謝の意を述べたいと思います。CJSでは、去る4月にこれらの先生方の業績とミシガン大退官を記念し、祝賀行事を催しました。

これだけ多くの人材を失って立ち直れるか、と心配する向きもあるかも知れませんが、大丈夫。幸いセンターの日常の業務は、**エイミー・キャリー、深澤ゆり**、その他の有能な人材に委ねられておりますし、センターは世界に誇れる教員、学生、そしてインフラ（次ページ以降参照）に恵まれております。とりわけアジア図書館、中でも**仁木賢司**司書が担当する日本コレクションは世界最高峰で、研究者向けの補助金支給制度もあります。**ブルース・ウィロビー**率いる出版会も優れた出版業績を残してきましたし、今後も期待されます。特に日本研究の名著を復刻する「ミシガンクラシックシリーズ」は各界から高い評価を得ています。また、毎週金曜日に優れた日本の映画を上映するフィルムシリーズ、毎週木曜日に日本研究者を呼んで行うレクチャーシリーズも好評です。今年の夏、センターは国際交流基金と財団法人草月会の後援のもと、勅使河原宏監督映画特集を開催しました。この秋学期に来学予定の講演者の中でも、ダンリー記念講演会には故ダンリー教授の教え子の方々が集まりますし、**ロバート・コール**元所長の講演も楽しみです。このようにクリエイティブな人々のネットワークを持つ日本研究センターは、本年度もまた幅広い充実したプログラムを提供して行きます。

この秋からの新しいメンバーをご紹介します。学生担当スタッフとして、**メアリエレン・バートロメ**が加わりました。修士課程の新入生は、**福永玲奈、エイミー・ラシュカウィッツ、ネイサン・スコット、嚴昭貞（オム・ソジョン）、楊玉彬（ヤン・ユービン）**の皆さんです。本年度のトヨタ招聘客員教授は**蒲島郁夫**先生にお越し頂きました。先生は東大卒ならずして東大教授職に就いておられる貴重な存在です。学部時代はネブラスカ大学で、ニュート・ギングリッチが言っていたように格好の政治入門である動物学を専攻されました。また2004年の秋学期には京都大学の北山忍先生が心理学部とCJSに加わることになっています。

ジョン・リー教授

あまり知られていませんが、センターにはとても充実したリーディングルームがあります。ほとんど使う人がいないのが残念です。朝日新聞に目を通すにも、大冊のレファレンスを用いるにも、一度お越し下さい。空調が効いて快適ですし、ミネラルウォーターも用意してあり、スタッフはいつも笑顔でお迎えします。

ミシガンに来て比較的日の浅い私自身の紹介をさせて頂きますと、アン・アーバーへ来る前はイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の社会学部並びに東アジア言語文化学部教授、他に客員教授として過去10年間にハーバード大、ワイカト大（ニュージーランド）、国立台湾大、慶応大で教鞭を執りました。社会理論が専門ですが、最新の著作としては"Multiethnic Japan"（ハーバード大学出版会、2001年）があります。また、現在ミシガン大学コリア研究プログラムのディレクターも務めています。ミシガン大学の数ある優れた地域研究センターの間で、専門を見失うことなしに、より一層の共同プロジェクトができればと思います。ミシガン大学は長い間、人間科学における最も野心的でダイナミックな知の探求を行ってきましたし、地域研究、国際研究において見事な学問的成果を生みだしています。私に課せられた最大の課題は、優れた研究を奨励し、ミシガン大学の、特に日本研究センターの優れた伝統を守っていくことだと思っています。

どうぞコメントや提案をお寄せ下さい(johnlie@umich.edu)。また、近くに来られた折りには是非お立ち寄り下さい。実り多い、楽しい学年度となりますように。

ジョン・リー
日本研究センター所長

Center for Japanese Studies
University of Michigan
ニュースレター・2002～2003年度

目　次

所長より	1
出版会から	2-3
図書館便り	3
特別記事 ゲイル・ネス	3-6
センター催し物	6-7
これまでの催し物	7-8
特別催し物	8
教員短信	8-10
学生・卒業生短信	10-11
客員研究員短信	11
教員・学生向け奨学金等	11-13
学会案内	13
お知らせ	13-14
2002～03年度 イベントカレンダー	14-15

清水美砂と役所広司
2002年秋学期フィルムシリーズの作品の一、
『赤い橋の下のぬるい水』(2001)より

出版会から

ここ数ヶ月の間、日本研究センター出版会は、マーケティング・在庫管理業務ならびに流通方法において生じた大幅な変更に適応すべく努力してきました。これらの業務は従来、ミシガン大学出版会が行っていましたが、同出版会が自らの出版物を含め一切の流通業務、及びアジア関連図書の出版から身を引くことを決めたため、日本研究センターではいかに読者の要望に応えていくか、決断を迫られることになりました。熟慮の末、私共センター出版会がマーケティング、在庫管理、流通を扱うことにしました。(これらは、実は1998年5月まで私共の業務の一部でした。)従って今後、日本研究センター出版会の出版物を入手の際は、私共に直接ご連絡下さい。また、出来るだけ多くの方へも、このことを伝えて頂ければと思います。既に変更のお知らせを送り、定期刊行物に広告を載せ、発送済みの2002年春のカタログにも新規注文に関する情報を載せましたが、混乱が生じている模様です。特に授業で使う目的で注文される場合には、この変更について書店にお知らせ頂ければ幸いです。

業務が増えたとは言え、私共は出版活動の手を弛めてはおりません。出版に向けて準備中の本が多数あり、2002年末から2003年初頭にかけて順次刊行の予定です。以下にそれを紹介します。

ダグ・スレイメーカー(ケンタッキー大学)編、"Confluences: Postwar Japan and France" フランス文学・哲学が戦後の日本に与えた影響と、両国に共通する戦後経験を探求する書。執筆者は**ケビン・M・ドーク、加藤周一、黒古一夫、ジャン=フィリップ・マスィー、マット・マツダ、西川長夫、J・トーマス・ライマー、佐藤紘彰、渡辺一民**、そして編者。(ISBN 1-929280-14-9、クロス装、$60.00)

バーバラ・ルーシュ(中世日本研究所)編、"Engendering Faith: Women and Buddhism in Premodern Japan" 従来見過ごされてきた日本仏教の発展における女性の役割を考察した論文20編の集成。イラスト豊富。(ISBN 1-929280-15-7、クロス装のみ、$69.00)

エツコ・テラサキ(コーネル大)著、"Figures of Desire: Wordplay, Spirit Possession, Fantasy, Madness, and Mourning in Japanese Noh Plays" 能楽における語りとトポロジー構造を解明した書。(ISBN 1-929280-08-4、クロス装、$60.00)

ビクトリア・ウェストン(マサチューセッツ大ボストン校)著、"Japanese Painting and National Identity: Okakura Tenshin and His Circle" (ISBN 1-929280-17-3、クロス装のみ、価格未定)

由紀・ジョンソン(トロント大)著、"Modality and the Japanese Language" (ISBN 1-929280-18-1、クロス装のみ、価格未定)

ヘレン・ハーデカー(ハーバード大)著、"Religion and Society in Nineteenth-Century Japan: A Study of the Southern Kanto Region, Using Late Edo and Early Meiji Gazetteers" 江戸後期に寺院と神社が複雑に絡み合って制度を成していた状況と、この制度全体が明治期になって複雑な変貌を遂げた具体的様相を考察した書。(ISBN 1-929280-13-0、クロス装のみ、$60.00)

網野善彦著、**アラン・クリスティー**(UCサンタクルーズ校)訳、"Rethinking Japanese History" ジョン・ホイットニー・ホール記念刊行図書(ISBN 1-929280-19-X、クロス装およびペーパーバック、価格未定)

トーマス・D・コンラン(ボードン大)著、"State of War: The Violent Order of Fourteenth-Century Japan" 同じくジョン・ホイットニー・ホール記念刊行図書(ISBN 1-929280-16-5、クロス装のみ、価格未定)

ローレンス・E・マルソー(デラウェア大)著、"Takebe Ayatari: A Bunjin Bohemian in Early Modern Japan" 18世紀中葉の文人の一生と、それを取り囲む時代状況の多面的考察の書。(ISBN 1-

929280-04-1、クロス装のみ、$64.95)

亀井秀雄（北海道大名誉教授）著、**マイケル・ボーダッシュ**（UCLA）訳・解説、"Transformation of Sensibility: Phenomenology of Meiji Literature"（原題『感性の変革』）日本文学史の記念碑的業績。(ISBN 1-929280-12-2、クロス装のみ、$60.00)

イエロン・ピーター・ラマーズ（在韓国オランダ大使館）著、"Treatise on Epistolary Style: Joao Rodriguez on the Noble Art of Writing Japanese Letters" 16 世紀末～17 世紀初頭の日本の外交文書および手紙文の文体に関する情報の宝庫。(ISBN 1-929280-11-4、クロス装のみ、$49.95)

上記その他の本のご注文は、
CJS, Publications Program
University of Michigan
202 S. Thayer St.
Ann Arbor, MI 48104-1608
tel: 734-998-7265
fax: 734-998-7982
までどうぞ。

CJS 出版会のすべての出版物の紹介とご注文の際の注意事項がセンターのウェブサイトに載っています。注文用紙のダウンロードも可能です。Publications をクリックして下さい。

日本研究センター出版会
総編集長
ブルース・ウィロビー

図書館司書より

アジア図書館では、9ヶ月以上欠員状態だった公共情報サービス責任者(Coordinator of Public and Information Services)に新任者が決まりました。前任者**陳 暁霏**（チェン・シャオフェイ）さんに代わり、イェール大学で同じ職に5年間いた**カルヴァン・許（シュウ）**さんです。シュウさんは日本語・中国語・韓国語での高度なウェブページの構築を得意とし、中国語と日本語が堪能です。シュウさんが加わったことで、アジア図書館では利用者の方々によりよいサービスが提供できるようになりました。

コンピューター室には現在、CJK データベースやCDその他のメディアによるデジタル資料があります。現在コンピューター室は通常、午前 8 時半から午後 5 時まで開いており、この間、図書館スタッフがご相談にのることができます。

ミシガン大学図書館本館 のインターライブラリーローン部が国際間の取扱を始めましたが、あいにく日本との公式なルートとしては国会図書館を通じるしかなく、利用者の必要とする文献を入手するには時間がかかり過ぎます。どうしても緊急に文献を取り寄せたいという利用者の方には、限られた数の私大図書館と特別な合意を取り付けていますので、そちらを通じて融通することができるかもしれません。他ではどうしても入手できない文献がある場合は、私の事務所にお越し下さい。

最近新たに大型セットおよび貴重な研究資料を購入しました。以下はその一例です。

印刷出版物
『新日本古典文学全集　全100巻』
『大正社会資料事典　全4巻』
『昭和社会資料事典　全3巻』
『日本の楽器　全6巻』
『年譜年表総索引1991年～2000年』
『政府白書目次総覧 第 1 ～ 3 期, 1991年～2000年　全 22 巻』
ほか多数。

CD-ROM
『万葉集 CD 人物レファレンス辞典』
『有斐閣判例六法』
ほか多数。

アジア図書館
日本コレクション
主任
仁木賢司

特別記事

社会学名誉教授**ゲイル・ネス**

神戸と聞けば、世界的に名だたる神戸牛のことか、1995年に襲った阪神大震災のことを思い浮かべる人が多いと思います。しかし神戸で行われてきた、山の頂を崩して海を埋め立て、人工島を造るという土木開発計画が、アジア各地の都市開発のモデルとなっていることを知る人は少ないでしょう。しかも我がミシガン大のゲイル・ネス社会学名誉教授が、神戸の成功例をアジアの各都市の行政官に伝えた陰の立役者であることも。一体どうして人口問題や経済開発、環境問題の専門家で、もとはと言えば東南アジア研究からスタートした人物が日本の神戸と関わるようになり、その結果、1985年以来毎年欠かさず神戸を訪れるほどになったのでしょうか。この紆余曲折を経た道のりはカリフォルニアから始まりました。

1929 年、ロサンゼルスで生まれたネス教授は、幼少の頃から国際経験に触れてきました。2 歳のとき、エンジニアであった父親が第 2 次 5 カ年計画のためにソ連政府に雇われることとなり、モスクワに引っ越します。一家はソビエト連邦で 1 年間過ごしたあと、シカゴに移ります。1948年、大学進学に当たり、ネス教授は西海岸に戻ってオレゴン州立大学に入学し、森林学を学びます。そして 3 年後、バークレーに編入し、社会学で学士号を取って1952年に卒業します。その理由は「木よりも人間に興味がわいた」ためなのだそうです。

ゲイル・ネス　夫人ジャニンと。

学士号を取得したあと、ネス教授は陸軍に入り、2年間兵役に服します。朝鮮戦争は既に勃発していましたが、「軍はこの戦争で負けるわけに行かなかったから、私はフランス送りになった」とネス教授は言います。しかし、幸運なことに在仏中にやがて夫人となるジャニンと巡り会い、二人は今年で結婚47年目になります。二人の築いた家族も、4人の子供たちがそれぞれデンマーク、バークレー、マレーシア、アン・アーバー生まれと、相当国際色豊かと言えます。

ネス教授が初めてアジアに関心を持ったのは、バークレーで大学院生だった時にキングズレー・デービスの人口学の講座を取り、デービス著"The Population of India"とアイリーン・トイバー著"The Population of Japan"を読んだときでした。当時海外留学をする機会は希でしたから、博士論文は図書館で二次資料を用いてインドと日本の経済的発展について書きました。これにより徳川時代や明治維新、近代以降の経済発展に魅了されます。

1960年の12月にバークレーで博士号を取得すると、ニューヨークの世界問題研究所からポスドク研究奨学金を支給され、東南アジアへ行って経済発展の研究をすることになりました。これによりマレーシアに4年住みましたが、その間に初めて日本へ行きました。1961年、夫人と二人の子供を伴って訪れた東京と大阪は、今正に高度経済成長期を迎えたばかりでした。日本社会のバイタリティーと組織構造に経済成長を促す要素を見て取ります。

しかし、日本に魅せられたにもかかわらず、次に訪れたのは1969年、大学院生のグループを連れて東南アジアに一年間研究滞在するため向かう途中でした。このグループの中には、いま日大国際関係学部教授でネス教授の親友でもある安藤博文（ミシガン大卒 1971年）がいました。安藤は一行を京大へ連れて行き、東南アジア研究センターをバリケード占拠していた学生と会わせて面接調査を行っています。米国と同様、学生達はベトナム戦争に反対しており、フォード財団が京大の東南アジア研究センターの資金援助をしていることにも抗議していました。

1974年にブカレストで開催される「第1回国連世界人口会議」に向けて、世界各地で事前調査が行われていました。その結果として1972年に東京で「アジア人口会議」が開かれましたが、ネス教授はそこで日大で人口学を教えていた黒田俊夫と出会います。二人はバンコックに本拠を置く国連アジア太平洋経済社会委員会(ESCAP)の顧問となり、アジア全域の家族計画政策の共同研究をスタートします。これは今日尚続けている日本の学者との共同研究の一つでした。

阪神大震災後の神戸

1985年、ネス教授の関心は神戸に向き、旧友の安藤・黒田と共に神戸の経験（山を崩し海を埋め立てる計画）をアジア各地の港湾開発のモデルとして使うことを考え始めます。これが神戸とシンガポールの比較研究に繋がり、その結果、興味深い共通点と相違点が浮き彫りになります。神戸とシンガポールは港があることと人口の規模において類似していますが、一方は都市、他方は都市国家という点が違っています。それでも開発促進のための組織編成のプロセスという点では共通点が多いことが分かります。つまり両者とも都市計画の効率を上げるには市街地を拡張する必要があったこと、港湾・市街地開発のために特殊な組織を作ったこと、都市の発展に職業生命を賭けた、豊かな知識を持つ強いリーダーと、優れた行政担当スタッフがいたことです。

この研究がもとで、1987年には神戸市と国連人口基金（UNFPA）の後援で「中規模都市における人口と開発」と題した大規模な会議が開催されました。同様の会議を国連人口基金はローマ、バルセロナ、メキシコシティーで開き、世界に対して都市部における人口・開発問題に目を向けるよう促して来ました。これら各会議はこうした問題の研究を継続して行っていくための研究組織の設立を目指すものでした。ローマ、バルセロナ、メキシコシティーは皆研究組織の設立という点で失敗しますが、神戸は成功し、1989年に神戸アジア都市情報センター(AUICK)を創設、現在でも業務を続けています。

神戸アジア都市情報センターは3つの主な活動を行っています。一つはアジア諸都市の問題の研究、一つは研究成果をニュースレターや研究報告、公刊物等を通じて世間に広めること、そしてもう一つはアジア諸都市の行政官を神戸に招き、統合された都市計画とはどういうものかについて研修を施すことです。同センターではパキスタン、日本、中国、インドネシアなどのアジア諸国で、都市行政官から聞き取り調査をしています。1991～92年にかけては、日本、インドネシア、韓国の三カ国から港湾都市を二つずつ選び（神戸・新潟、ジャカルタ・パダング、釜山・木浦）、掘り下げた研究調査を行いました。各国とも前者の都市が繁栄しており、後者の都市ではかつての規模と経済パワーからの縮小が見られました。この研究により港湾開発と人口増大との関連がより良く理解できるようになりました。

これら一連の研究により、神戸の繁栄には日本の自治体で働く職員の処遇が原因としてあることが明らかになりました。制度上の特徴として、高卒ないし大卒直後に就職することができ、キャリア上一つの自治体内の様々な部署や局に途中で移ることが可能で、一都市の行政職員という道を一生の職業として選ぶことが可能となっています。その例として神戸アジア都市情報センター設立の時点で宮崎市長は在職17年目であり、神戸市職員としては50年近くのキャリアがありました。これに比べてインドネシアやインド、パキスタンなどでは、市の職員の離職率が高いことが大きな問題です。都市から都市へ昇進の機会を求めて移動するため、経験を積むことも一つの都市との深い関わり合いも持つこともなく、強い指導者が生まれにくいのです。タイはやや事情が違いました。AUICKの調べではタイの都市部自治体の職員は女性と男性がほぼ同数ですが、調査した女性の勤続年数は5年から20年だったのに対し、男性は遙かに短期間である（数週間から数年の場合が多い）ことが分かりました。神戸市役所における宮崎市長の在職期間の長さと、市長と共に働く行政担当者の豊かな経験と責任感の強さが相ともなって、神戸市の繁栄に大きく寄与したのでした。ネス教授は神戸アジア都市情報センターと共にアジアの全ての都市に対して日本型の都市行政のしくみに改編し、担当職員がみずから日々生活し、そこで職員として働く都市のことを良く知り、強い責任感を育てるべきことを提言してきました。

この強い責任感は1995年1月17日午前5時46分、あの阪神大震災が神戸を襲ったときに顕著な形で表れました。郊外に住む多数の市職員が市街地に駆けつけ、救援活動を行いました。通信回線が切断されたため、職員たちはほとんど無傷で立っていた23階建ての新市庁舎に集結し、状況の把握に努めました。電話回線は使い物にならなかったので、消防署や救急隊との連絡には携帯電話が使われました。

阪神大震災が起こったときネス教授はスイスにおり、その後12週間して神戸を訪れましたが、そこには目を疑う光景が広がっていたと言います。市役所の職員から被害状況の詳しい説明を受けた後、職員の案内で街中を見て回り、つぶさに被害を確かめました。最も被害の大きかったのは灘区。振動でガス管が破損し、大規模な火災が起きましたが、水道の本管も破裂したため、緊急隊員は火を消すことができませんでした。最終的に灘区の総延焼面積は4.8ヘクタールに及びました。ネス教授はこの小さな灘区の惨状を見て、終戦直後の1945年に撮られた神戸の航空写真が思い起こされてならなかったと言います。しかし更にネス教授を驚かせたのは、「ものの見事な緊急動員力」を神戸が発揮したこと、特に2万5千戸分の被災者用プレハブ住宅をわずか数日の間に設置したことに感銘を受けました。

震災のあと神戸を離れた住人が多かった中で、新たに神戸に移り住んできた人も少なくありません。港湾施設の復興を優先しすぎるとして非難された神戸市ですが、ネス教授は港こそ神戸の経済活動の中心であると言い、一年未満で港を再開できたことを高く評価しています。今では神戸市には震災復興を記念し犠牲者を追悼する公園がいくつもあり、港は震災前の出荷高の80%にまで回復しています。しかし、神戸の海運業界はここ数年来、組合問題、港湾施設のコスト高などの問題をかかえ、その政治的解決を見るには至っていません。神戸を含め今日の日本の抱える最大の問題は高齢化社会です。労働力を維持するためには外国人労働者を増やすか、女性の職場進出を促すか、さもなければ出生率を増やす必要があります。どれ一つ取っても容易ではありません。

ネス教授は神戸の事業に依然関わっています。2000年にはAUICK主催の5都市間人口・環境動態調査を監修しました。調査対象に選ばれたのは、パキスタン・ファイサラバード（貧困かつ不安定）、フィリピン・セブシティー（国の中央政府が弱く、市行政も弱い）、タイ・コンケーン（国・市共に開発促進に成功）、韓国・釜山（豊か、高度に開発中。近年不死鳥のごとく灰から甦った）、神戸（世界で最も豊かで行政的にも成功している都市の１つ）の５都市。STELLA モデリングプログラムを用いて25年分のデータ（1970～95）を分析した結果、今後の25年を予測することが可能になりました。この調査は"Five Cities: Asian Urban Population Environment Dynamics"（オックスフォード大学出版会、2000年）と題して公刊されました。

AUICK 会議でSTELLA について話し合う、ゲイル・ネスとアジアの代表者。

神戸アジア都市情報センターでは今現在、ネス教授とインド人研究者との共同編集による研究書"Asian Urbanization in the New Millennium"を資金的に援助しています。同センターの他の研究と同様、このプロジェクトでも現地の社会科学者のチームと都市職員のチームに関わってもらっているのが特徴です。対象国15カ国というこの研究は、過去50年の都市化の状況を調べ、この先の25年間を見通した課題と変動について論ずるものです。

ネス教授と神戸アジア都市情報センターとの関わりは続いており、研究の立案や調査結果の整理、ニュースレターへの寄稿、米国からの資金調達などの形で貢献しています。また同センターには、当初の計画どおり6名で構成される国際諮問委員会が設けられており、ネス教授も加わって計7名で成り立って

います。南アジア２名、東南アジア２名、東アジア２名（それぞれ１名は行政担当者、１名は社会科学者）にネス教授というこの７名のグループは最低でも年に１度集まって、神戸とアジアのおよそ25の都市の行政担当職員とを親密に結びつけています。

ところで神戸や兵庫県を知るのに格好の材料として、ネス教授はかつて在大阪英国領事館に勤めていたジェイムズ・メルヴィルの書いた探偵小説を推薦しています。大谷警視という架空の主人公が登場し、殺人事件を捜査していくメルヴィルの推理小説は、事情をよく調べて書いてあり、兵庫県警に多くのファンを作りました。メルヴィルには他にも1927年の日本を今日の日本と比べた "The Imperial Way" という著作があります。

ネス教授は現在も教壇に立っています。2002年度冬学期にはミシガン大の教員ならびに図書館の所蔵する膨大なフィリピン関係のリソースを紹介する特別コースを組みました。また1989年に学内の複数の学部の教員の提案で始まった「地球的規模の変化を考える講義プロジェクト」にも参加しています。このような学際的な講義科目が出せるのは「やはりミシガン大学の素晴らしい点」だとネス教授は言います。

ミシガン大学社会学部および公衆衛生学部で教鞭を執ること33年、その間に東南アジア研究センター所長ならびにアソシエート、日本研究センター・アソシエートも務めてきたネス教授。大学教員としてのキャリアの全てをミシガン大に捧げた理由として、「アジアを学ぶのにミシガンは世界で一番良い大学。アジア全域にまたがる世界トップクラスの研究センターを擁し、殆どの学部・学科にアジアの専門家がいて常勤で教えている。世界のどこにもミシガンほどアジアを広く深く扱っているところはない。言語を見ても、ビルマ語、中国語、ヒンズー語・ウルドゥー語、インドネシア語・マレー語、日本語、韓国語、ペルシャ語、タガログ語、タイ語、ベトナム語と幅広く学べる。平坦で退屈なミシガン南東部にこれほど国際色豊かな世界に冠たる大学があること自体、驚きだ」と述べています。

センター催し物

トヨタ招聘客員教授（TVP）

蒲島郁夫教授

新しくトヨタ招聘客員教授になられた**蒲島郁夫**教授のレセプションが9月25日午後4時から、ソーシャルワーク学部ビルの３階、3603号室の前で催されました。日本に関心を持つ人々が蒲島教授を囲んで親睦を持つよい機会となりました。

蒲島先生はネブラスカ大学でB.S.（動物学）およびMA（農業経済）を取得ののち、ハーバード大でPh.D.（政治経済学）を取得されました。17年間筑波大学で教え、1996年には同大大学院国際政治経済学研究課長を務めた後、1997年に東京大学法学部教授に就任。数名の外国人教授以外では、80名の東大法学部教員のうち蒲島先生お一人が東大出身ではないとのこと。

蒲島先生には日英両語による多数の業績があり、テーマも日本のマス・メディアと政治の関係に始まり、日本の政治変動と有権者の政党認知の変容について、エリートと平等の理念について、など多岐に亘ります。日本選挙学会理事長（2000-2002）を務め、現在世界政治学会副会長、日本政治学会理事、Japanese Journal of Political Science 編集委員。

2002年秋学期の間、ミシガン大では「現代日本政治」と題した5週間のミニコースを担当なさいました（Asian Studies 491, Political Science 491/691）。

フィルムシリーズ

この秋、センターでは**役所広司**主演の映画をシリーズで上映しました。もと公務員だった経歴にちなみ役所という芸名を持つこのスターは、1980年代初期にデビューして以来、数多くの映画に出演してきました。中でも1997年はヒット作が４本出た大躍進の年でした。フィルムシリーズの皮切りは9月20日上映の『Shall We Dance?』から。日本国内でも国外でも一番知られているこの作品は、サラリーマンの主人公が通勤途中にふと垣間見たダンス教師への憧れを描いて楽しませてくれます。同じく1997年の『うなぎ』『失楽園』『バウンスkoGALS』も上映日程に入っています。黒沢清監督の恐怖映画『CURE』もあります。9月20日から11月22日まで毎週金曜夜7時からローチホール・オーディトリアムで上映。入場無料。すべて日本語、英語字幕付。イベントカレンダーで全上映作品をご確認下さい。

ヌーンレクチャーシリーズ

この秋のヌーンレクチャーシリーズは、9月19日（木）から始まり、映画、産む権利、宗教、文学、組織行動、歴史、と幅広いトピックに亘りました。講演者は、**ジョセフ・マーフィ**（フロリダ大）、**ティアナ・ノルグレン**（「開かれた社会」研究所、産む権利と女性の健康プログラム）、**デイビッド・レーニー**（ウィスコンシン大）、**ジョン・ネルソン**（サンフランシスコ大）、**スーザン・ネピア**（テキサス大）、**タイモン・スクリーチ**（ロンドン大）、**アキラ・水田・リピット**（カリフォルニア大アーバイン校）、**ロバート・コール**（カリフォルニア大バークレー校）、**デビッド・ハウエル**（プリンストン大）、**蒲島郁夫**（トヨタ招聘客員教授）の各氏。詳細および冬のレクチャーシリーズについては最終頁のカレンダーをご覧下

さい。講演は全て無料。毎週木曜日正午～午後1時まで、ソーシャルワークビル1階の1636号室で行われます。簡単な飲み物とスナックが用意されます。

ロバート・L・ダンリー追悼記念講演・レセプション

第五回となったロバート・L・ダンリー追悼記念講演・レセプション。10月11日午後4時からミシガンリーグ2階のミシガンルームで催されました。ダンリー教授の教え子だった**シャラリン・オルバー**（ブリティッシュコロンビア大、日本文学）、**アン・シェリフ**（オベリン大、日本文学）が「翻訳事情 ― 日本文学の英訳の理論と実際 ―」に関して語りました。

これまでの催し物

退官記念祝賀パーティー

去る4月23日、日本研究センターは退官された**ホィットモア・グレー**、**ロジャー・ハケット**、**ウィリアム・マルム**、**ゲイル・ネス**、**ハロルド・スティーブンソン**、**竹下譲**の6名の名誉教授を招き、ミシガン大学美術館内にて祝賀パーティーを催しました。この6名の方々がミシガン大学の日本研究に果たした功績を讃えようと、約50名の人々が集いました。

一同はワインやオードブルを手にそれぞれ歓談の時を過ごし、現在美術館で展示中の「花魁、女装男装、隣の娘 ― 浮世絵版画に見る女らしさ ―」を鑑賞するひとときも設けられました。この展示の企画は**マリベス・グレイビル**（CJSアソシエート、東洋美術主事）によるものです。

6名の名誉教授は、かつての教え子ないし現職教員から参加者一同に対して紹介されました。ホィットモア・グレー教授は出張中でこの会には参加できませんでしたが、**殿村ひとみ**前日本研究センター所長によって紹介されました。グレー教授はロースクール名誉教授としてミシガン大とニューヨークのフォーダム大で非常勤で教壇に立つと共に、ニューヨークの LeBoeuf, Lamb, Greene & MacRae 法律事務所でパーフタイムの勤務をしておられます。最近カンボジア政府のために新たな調停法を草案、インドネシア政府のために新規の契約法の草案、ベトナムでアメリカの契約法について講演、と活躍中です。

ロジャー・ハケット教授を紹介したのは、同じ分野の研究者であり友人、かつ教え子でもある**リチャード・スメサースト**（ピッツバーグ大、歴史学）。かつての日本研究センター所長、Journal of Asian Studies の編集委員でもあったハケット教授は歴史学名誉教授となりました。近代日本史の専門家としてその著 "Yamagata Aritomo in the Rise of Modern Japan, 1838-1922"（ハーバード大学出版会、1971年）は特に有名です。

ビル・マルム教授の紹介を引き受けたのはかつての学生、**ジューディス・ベッカー**（音楽学部教授、東南アジア研究センター所長）です。マルム教授は東洋音楽および民族音楽学の専門家として、1993年には栄誉ある小泉文夫音楽賞を受賞しています。著書には"Six Hidden Views of Japanese Music"（カリフォルニア大学出版会、1986年）、"Music Cultures of the Pacific, the Near East and Asia"（プレンティスホール、1967年）等があります。

ゲイル・ネス教授の紹介は、東南アジア研究センターの同僚、**ピーター・ゴスリング**人類学科名誉教授が行いました。社会学科を退官したネス教授は、アジア地域の人口や環境、開発問題の専門家です。最近の著作として、共編になる "Five Asian Cities: Studies in Asian Urban Population Environment Dynamics"（シンガポール・オックスフォード大学出版会、2000年）があります。

ハロルド・スティーブンソン教授は、かつての教え子**デビッド・クリスタル**（ジョージタウン大、心理学）が紹介の労を執りました。スティーブンソン心理学科名誉教授は、日本・中国・アメリカの子供の発達を中心に研究生活を送りました。"The Learning Gap"（サイモン&シュスター、1992年）、"Child Development and Education in Japan"（W.H.フリーマン、1986年）等の著書があります。

最後に竹下譲教授は殿村ひとみ前CJS所長が紹介しました。公衆衛生学部名誉教授となった竹下教授は、開発途上国、特に東アジアと東南アジアにおける人口及び保健問題を始め、日米の保健衛生の営みの文化的相違、第二次大戦中の日系米人の強制収容問題を中心に研究してきました。

日本研究センターにおいてこれら6名の教授が果たした多大なご貢献に対し、センター関係者一同、この場をお借りしてふたたび感謝申し上げたいと思います。

サマー・フィルムシリーズ

この夏、センターでは「VITA」と題したフィルムシリーズを催し、国際的に有名な**勅使河原宏**監督の作品を取り上げました。上映作品は『おとし穴』『砂の女』『他人の顔』『いのち』『サマー・ソルジャー』の5作品。アン・アーバー初公開の作品が含まれていたこと

退官記念パーティーで、左からウィリアム・マルム、ゲイル・ネス、ハロルド・スティーブンソン、ロジャー・ハケット、竹下譲

もあり、上映会は大好評でした。30年以上にわたり勅使河原監督は一貫して、社会と対峙しつつ折合いを見いだしていく人間をテーマに創作活動を行いま

した。同監督は自ら映画会社、勅使河原プロダクションを持ち、**安部公房**との共作で世界的に有名です。その一つ、『砂の女』はカンヌ映画祭で審査員特別賞を受賞、またアカデミー賞でも外国映画部門のベスト作品にノミネートされたばかりか、アジア人として初めてベスト監督賞にもノミネートされました。福井県宮崎村に「草月陶房」を開窯、草月流生け花第三代家元でもあった同氏は、映画制作だけでなく生け花、陶芸、絵画、書道、インスタレーション・アートの分野でも世界的に知られています。2001年4月死去、享年74歳でした。(このフィルムシリーズは、国際交流基金並びに財団法人草月会のご協力で実現しました。)

特別催し物

「日本から見た中国」展

ミシガン大学美術館（UMMA）東洋美術ギャラリー

2002年9月21日～2003年1月26日

18世紀後半から19世紀初めにかけて、中国の文化は日本のインテリ層、特に政権と関わりの薄かった文人達にとって限りない憧れの対象でした。詩人や医者、商人であった彼らは積極的に漢籍を輸入し、漢詩を詠み、文人画を描きましたが、当時は海外渡航が禁止されいたため、彼らの描く中国像は理想郷であり、現実臭さで汚されていません。今回の展示は、主にミシガン大美術館の所蔵品の中からことさら中国風を模した絵を15ないし20点選んで公開しました。他美術館所蔵品を集めた大中国絵画展(『中国絵画の傑作展～霞と雲を追い求めて～』2002年10月12日～2003年1月5日）を並行して開催したので、「日本から見た中国」展は、日本の文人画家たちがお手本からいかに大幅に離れ、それまでにない独自の風景を作り上げたかを見せてくれました。江戸時代の日本において中国とは何であり、いかなる意味を持っていたのかを探る展示です。

『新石器時代から12世紀までの中国埋葬美術品』　2002年9月7日～2003年7月20日の間、ミシガン大学美術館東洋美術ギャラリーで展示されています。また『中国絵画の傑作展～霞と雲を追い求めて～』の一環として、**ジェームズ・ケイヒル**（カリフォルニア大バークレー校、美術史名誉教授・ミシガン大卒）による日本絵画・中国絵画に関する公開ゼミが11月10日と11日の２回に亘って開かれました。

教員短信

ヒュー・デ・フェランティ（日本音楽学、アジア言語文化・音楽学部）昨年９月より大阪の国立民族学博物館で特別研究員。５月に以前からの研究をまとめて共著 "A Way a Lone: Writing on Toru Takemitsu" を出版。

江森祥子（アジア言語文化、日本語科講師）５月に「程度副詞『たいてい』の分析とその導入部の提案」と題し第10回プリンストン大日本語教授法ワークショップにて発表。発表内容は学会紀要に収録されます。同じく5月にACTFL主催のOPIワークショップにも参加、日本語能力判定者としてACTFUL認定に挑戦中。

マイク・D・フェターズ、佐野潔（家庭医学、日本家庭健康プログラム）2週間に亘る春期家庭医学促進ツアーに参加。三重大学、亀田メディカルセンター、総合保原中央病院、名古屋大学、長崎大学、大分大学、北海道家庭医療センター等の家庭医学・総合医学部、病院、研修施設等を回り、延べ400人の参加者を相手にさまざまな話し合いを持ちました。

11月には第4回プライマリ・ケア国際フォーラム（於名古屋大学）と第17回家庭医療学研究会（東京、建築会館）に講演者として参加。また米国でも全米家庭医学研究会から日本からの問い合わせの窓口になってくれるよう依頼を受けました。フェターズ医師は更に家庭医学教育者研究会春季大会（サンフランシスコ）で "Doctor-patient Communication: A Comparison of the United States and Japan" と題した論文を発表、また、"Lessons learned in developing family practice training programs in Japan"、"Japanese physicians' experiences in family medicine faculty development training programs abroad" と題したポスターを発表。フェターズ医師の最近の日本関係の出版物には「質的研究の方法論の妥当性に関する研究 ー フォローアップ・アンケートの結果から」("Analysis of the

Validity of the Qualitative Research Methodology through a Post-interview Survey")(『プライマリケア』, 2001)、「開業医と大学総合診療部との架け橋ーいかにして協力関係を築いていくか」("Building Bridges between General Practitioners and University Department of General Medicine")(『プライマリケア』, 2001)、"Responsibility and Cancer Disclosure in Japan"(Social Science & Medicine, 2002)、書評 "The Ritual of Rights in Japan－Law, Society, and Health Policy" (Journal of Japanese Studies, 2002)などがあります。

アイリーン・ガッテン（CJSアソシエート） 伊井春樹編『大阪大学国際日本文学研究集会・講演とシンポジウム国際化の中の日本文学研究－その課題と方法への模索－』（大阪大学国語国文学会、2002年3月）中に「平安文学の将来」を日英両語で発表。またアトランタで開かれた南部日本セミナーで「物語としての平安時代の私信」と題し講演。6月にはハーバード大に於ける「平安時代における中央と辺境」と題した学会に参加しました。10月と11月はイタリアのベニス大学で過ごしました。

ケン・イトウ（アジア言語文化） "Class and Gender in a Meiji Family Romance: Kikuchi Yuho's Chikyodai"を Journal of Japanese Studies の2002年夏期号に発表。5月にはハーバード大ライシャワー研究所で開かれた「戦前の中流階級」に関するワークショップでこの論文に解説を加えました。

ウィリアム・マルム 2002年秋日本で5週間の滞在研究をするための短期研究補助金を獲得。2003年春に制作予定の琴を紹介するビデオの下準備として日本の学者・演奏者と協議しました。更に長唄の歌詞のアンソロジー編集に向けた調査も行いました。

阿部マーク・ノーネス（アジア言語文化・映画ビデオ） 成田空港周辺で、数十年の長きに亘り空港建設に反対してきた農家に聞き取り調査を実施。小川プロダクションとその制作による三里塚闘争の記録映画に関する本を執筆中。

岡まゆみ（アジア言語文化、日本語講師） プリンストン大OPIワークショップに参加しました。著書『中・上級者のための速読の日本語』("Rapid Reading Japanese: Improving Reading Skills of Intermediate and Advanced Students") (Japan Times, 1998) は第8版を迎えました。2002年4月4日にはミシガン大学 Telluride House Faculty Forum Series で "Haiku: Profound Insight within 17 Syllables" と題し講演、2002年5月11日には第10回プリンストン大日本語教授法ワークショップで "The Necessity of Teaching Metaphorical Expressions in Japanese Language Education: A New Approach Using Students' Native Tongue at the Advanced Level" を発表。

小野博美（社会問題研究所－ISR） ISR では日本人男性と家事に関する研究報告を出版しました。この調査によれば、家事に関する限り日本人男性は世界一怠惰であるとの結果が出ています。アメリカ人男性のわずか1/4、スウェーデン人男性の1/6しか家事に時間を割いていません。食事の準備や掃除等で日本人男性が一週間に費やす時間は、4時間。日本人女性は週29時間を家事に費やしています。研究の対象になったのはカナダ・ロシア・フィンランド・ハンガリー・日本・スウェーデン・米国の各国。BBCのウェブサイトにこの話は掲載されており、「日本人の男は怠惰過ぎるか」という問に読者が意見を書けるようになっています。読者の反応は http://newsvote.bbc.co.uk/hi/english/talking_poing/newsid_1871000/1871441.stm で見ることができます。

ゲーリー・サクソンハウス（経済） 2002年暮れから2003年春にかけて、イタリアのコモ湖々畔にあるロックフェラー財団ベラジオセンターで研究員として過ごします。執筆中の "The Evolution of Labor Standards in Japan: Human Rights, Scientific Management, and International Economic Conflict" の原稿書きをする予定。

ロバート・シャーフ（アジア言語文化、仏教学） Arthur F. Thurnau 記念教授の称号と待遇を授与され、秋学期は Sweetland Center の上級研究員として過ごしました。8月、ホノルル芸術アカデミーで開催された「母胎と綾－日本の文化と社会における真言密教の表現について－」と題するシンポジウムで "Mantra Recitation and the Logic of Shingon Ritual" と題した論文を発表。

鈴木雅恵筆「いろは歌」

鈴木雅恵（アジア言語文化、書道講師） 大学美術館の解説ボランティアの人々に対し講習を実施しました。「いろは」唄を書にした一連の作品が、書道家・レタリング家などを読者層に持つ国際的な雑誌、Lettering Arts Review 2002（情報記事、論評、作品写真など豊富）に掲載されました。編集人 ローズ・フォルサム、発行人 ジョン・ニール。9月号。

高原威（美術） 夏・秋と展示会および講演・指導を度々行っています。7月9日～13日の間、名古屋芸術大学でゲストアーティストとして講演や大学院生への実技指導を行いました。7月27日にリトアニアのビルニウスにあるガレリア・バルタイで版画の個展（～8月23日）のオープニングに出席。10月中旬にはマサチューセッツ州サウスハドレーのマウント・ホリーオーク・カレッジ美術館で展示があり、ゲストアーティストとして数日間滞在。その間に同州アマーストのマサチューセッツ大学でも講演を行いました。

殿村ひとみ（歴史学、女性学、アジア言語文化）　日本研究センター所長として1995年以来多くの方々から頂いたご支援に感謝申し上げます。ミシガンと日本で多くの人々と知り合いになりましたが、特に実業界の方々からは厚いご支援とご厚情を頂きました。所長としての奉職期間、センターの同僚教員から貴重なアドバイスをもらいました。歴史学部の同僚教員達もこの間、深い理解を示してくれ、様々な雑事から解放してくれました。学生には親密な指導ができずに迷惑をかけましたし、特に息子には８歳から１５歳までの間ストレスで疲れ切った母親としてしか接することが出来ませんでした。センターのスタッフは誠心誠意仕事をこなしサポートしてくれました。３期に亘る所長職の期間を支え続けて下さったのみならず、それを非常に有意義な経験にさせてくれたすべての方々に対し、深い感謝の念で一杯です。国際交流基金の援助を得て、東京大学史料編纂所で侍文化におけるジェンダーと暴力を研究するため秋からは日本で過ごしています。

マーク・ウェスト（法学部）　2002年2月26日、東京で「アメリカのロースクール　その理念と現状」と題したシンポジウムを開催。米国型の法学教育システムと日本におけるその可能性について意見交換をする機会を提供しました（ミシガン大学ロースクール、日本弁護士連合会協賛）。

アンナ・ジェリンスカ＝エリオット（アジア言語文化、日本語科講師）　夫のマーク・エリオット（歴史学科、満州国の歴史を研究中）と共にアン・アーバーに。東京外語大で日本語言語学で修士を、更にワルシャワ大学で日本研究の修士を終えています。カリフォルニア大学サンタバーバラ校で日本語講師、東京の朝日カルチャーセンターでポーランド語の講師をしていました。

学生・卒業生短信

修士課程の新入生をご紹介します。**福永玲奈**　ブランダイス大学で東アジアの政治と歴史を学びました。卒業後一学期間、広島大学に。ミシガン大ではグローバリゼーションと多国籍化について学ぶ予定。グローバルな相互依存性と文化外交に関する知見を増やしたいと思っています。

エイミー・ラシュカウィッツ　北海道の函館で９週間ホームステイをし、また、JET プログラムにより熊本の阿蘇の高校で英語教員を務めました。CJSでは日本の歴史と文化を学び、大学レベルで教えたいと思っています。

ネイサン・スコット　学部時代はスペイン語・日本語・中国語・世界史を学び、卒業後 JET プログラムに参加して、日本語力を強化しました。最終目標はスペイン文学と日本文学の研究を合わせた比較文学で博士号を取ることです。

嚴昭貞（オム・ソジョン）　韓国生まれ韓国育ちですが、日本語と日本文化に触れる機会が多数ありました。一番関心があるのは、現代韓国と日本に共通な特質である政治構造や経済のしくみ、人々の行動の仕方、日常生活などです。CJSでは日本と東アジアの近代の構築において知識人の言論の果たした役割を解明し、他の東アジア諸国がそれぞれ持っていた近代を語る枠組みの上で日本とどう関係を発展させてきたかを探りたいと思っています。

楊玉彬（ヤン・ユービン）　大学卒業後５年以上日本の企業で働いた経験を通じ、個人のアイデンティティーや社会が持ちうる力を見たときに、そこに言語と文化の果たす巨大な役割があることに気付きました。このことから外国企業で成功したいと思うならば、優れたコミュニケーション能力と、深い文化的理解が不可欠であることに思い当たりました。CJS では多文化の環境でコミュニケーション能力を伸ばし、英語圏や西洋の文化に対する知識も増やしたいと思っています。

他にも日本を視野に入れた研究を目指す新入生は以下の通り。**趙秀美（チョ・スミ）**（人類学）、**ベンジャミン・コール**（ビジネス）、**ケリー・ローウィル**（歴史）、**尾野嘉邦**（政治学）、**ニコラス・タイセン**（比較文学）。

マーニー・アンダーソン（歴史）　今年度は国際交流基金の博士課程奨学金とフルブライト IIE の博士課程奨学金を授与されました。また2001年6月にはマイケル・チェンと結婚し、挙式をオレゴンと台湾で挙げました。

アレックス・ベイツ（アジア言語文化）　フルブライト IIE 奨学金を獲得。冬から日本へ行き、博士論文にむけた研究を行う予定。

トム・ブラックウッド（社会学）　フルブライト・ヘイズ博士論文海外研究奨学金を支給され、現在日本に滞在中。日本の学校における、スポーツを通じた若者の社会化と教育を研究しています。東京大学社会科学研究所に在籍。

ゲーリー・デコッカー（CJS修士 1986年、比較教育学博士 1987年）　現在、オハイオ・ウェズリアン大学教育学部学部長兼東アジア研究プログラムディレクター。編著 "National Standards and School Reform in Japan and the United States" が2002年2月にコロンビア大学 Teachers College Press から出版されました。

ヴィンス・ファイク（1999年 CJS卒）　シカゴ在住、JETRO の農業部門で働いています。この夏 ララ・ヴァイヴと結婚。

ベサニー・グレナルド（人類学）　韓国済州島で開かれた「第１回国際海女学会」で "Values of Jamnyeo in the History of Ocean Civilization and their Cultural Heritage" と題して講演。2002年夏には自治体国際化協会 ニューヨーク事務所 (CLAIR, New York) からインターンとして受け入れられました。

グレン・ヘッカー（国際ビジネス博士、2001年） 夏イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校に移り、現在経営学部助教授（戦略的経営学）兼東アジア・太平洋研究センター賛助教員。日本関係の研究を続けており、この夏、博士論文を基にした論文を日本ビジネス研究学会 および 国際ビジネス研究学会で発表しました。

アニー・ホガート（1995年CJS卒） ミシガン州立大学の教育学専攻プログラムで、博士課程科目履修の３年目を終えました。2003年～04年にかけて、文部省の打ち出した２１世紀教育新生プラン（レインボープラン）に基づくカリキュラムの分権化を調査しに西日本の農村部に滞在する予定。

ルース・キーソー＝ヴェイル（1997年CJS 卒） イリノイ州レークフォレストのレークフォレスト・アカデミーで渉外広報ディレクターを務めています。シカゴ沖縄県人会祭り太鼓グループの一員でもあり、シカゴ周辺の各地で実演をしています。また夫のマークと共に自著 "Women of Okinawa: Nine Voices from a Garrison Island" について各地を講演旅行も。

フォーレスト・R・ピッツ（1948年CJS 卒） CJS 50周年記念イベントに参加した後、著名な地理学者の自叙伝集を本にするプロジェクトを旧友と相談するためにペンシルバニア州立大へ向かったのが1997年11月のこと。それが最近実り、ピア・グールド、フォレスト・R・ピッツ編 "Geographical Voices" としてシラキューズ大出版局から刊行されました。自ら寄せた一章、 "Sliding Sideways Into Geography" では、アン・アーバーとCJSの話に大きく紙面を割きました。現在はハワイ大学名誉教授。

エリック・ラス（CJS 卒業生） 論文 "Chanters at the Gate: Ritual/ Performing Arts of Fifteenth-Century Japanese Outcasts" を Medieval and Early Modern Rituals: Formalized Behavior in the East and West (Brill, 2002) の一章として出版。更に "Challenging the Old Men: A Brief History of Women in Noh Theater" をWomen & Performance: A Journal of Feminist Theoryの特別号Performing Japanese Women, 23.12.1 (2001) pp. 97-111に発表。更にカンザス大学において、学部生対象の授業の優秀さを評価され、表彰されました。

デイビッド・ロゼンフェルド（アジア言語文化卒業生） Lexington Books から著書 "Unhappy Soldier: Hino Ashihei and Japanese World War II Literature" が出版されました。

ピーター・シャピンスキー（歴史学） フルブライト奨学金を獲得し、2001～02年度は東京大学史料編纂所で、博士論文のテーマである室町・安土桃山時代の瀬戸内海における海賊と海運業に関する研究を行いました。

メリンダ・スタント（ミシガン大学学部生、経済・日本語専攻） 在デトロイト日本国総領事館主催の「2002年度ミシガン州日本語スピーチコンテスト」で第２位になりました。岡講師の日本語読解クラスの学生でもあり、スピーチのテーマは「日本の祝祭日の印象」でした。

マーカス・ウィレンスキー（1999年CJS卒） ２月に翻訳会社ダイナワードの管理者職を辞め、株式会社フォーミュレーションに転職しました。東京渋谷に本社を置く同社は、テレビ番組作成時のリサーチ・支援業務の提供を主に行っており、日本国内地上波、衛星、ケーブルTVのリサーチ市場で50%以上のシェアを持ちます。国際部の部長として、海外のニュース映像などの資料・VTRを検索し、日本国内での映像使用権の交渉をとり行うのが仕事。しかし2002年4月12日に娘のサヒーナ・キャサリン・ウィレンスキーが生まれたことは、転職の興奮さえ足下にも及ばない程、大きな人生の出来事でした。

客員研究員短信

安部　仁（三井生命保険相互会社企画調査グループ副長） ミツイライフ金融研究所客員研究員として2002年5月から２年間の予定でアン・アーバーに滞在します。主要研究テーマは会計学。グループマーケティングの経験を持ち、営業部員と保険外交員に広範に亘る営業支援活動を行ってきました。ミシガン大の研究室は UMBS Rm D8214, (734)764-9240 です。

市村　誠（中央大学商学部助教授、財務管理） 2001年3月からミツイライフ金融研究所にて客員研究員。 滞在を2003年３月まで延長し、フリーキャッシュフローと経済付加価値（EVA）の研究を続行します。

清田 礼乃（あやの）（聖マリアンナ医科大学、医博）2002年秋～2004年秋までの２年間、「日本家庭健康プログラム」と家庭医学部で客員研究員。

村上千智（日本語科講師） 2002年秋学期だけの着任。昨年は日本で過ごし、その前はミシガン州立大学で日本語の教鞭を執りました。

吉岡哲也（医博） 2002年～03年度、「日本家庭健康プログラム」と家庭医学部で客員研究員。

ジョナサン・ズウィッカー（コロンビア大博士、近世日本文学） Michigan Society of Fellows のポスドク特別研究員、日本文学科助教授として向こう3年間過ごします。過去2年間は法政大学客員研究員。研究分野は文学と文化史の関係。博士論文では、文学形式と出版・講読史の関わりを手がかりに、江戸後期から明治初期にかけての人情本や戯作本の系譜を辿っています。

教員・学生向け奨学金等

教員向け

2002 ～ 2003 年度の教員対象研究奨励金の受給者が４月に発表になりました。個人およびグループ研究用奨励金は、日本社会・日本文化の何らかの側面を対象とする研究に与えられます。以下は受給者とそれぞれの研究テーマです。

ポール・V・ダンラップ（生物学準教授） 「ヒイラギ科魚類における共生の共進化について」("Co-Evolution of Symbiosis in Japanese Ponyfish") この研究の

長期的目標は、宿主である魚とその発光腺に共生しているバクテリアが共進化してきた度合いを定め、その共進化の過程としくみを解明することにあります。

マイク・フェターズ（家庭医学助教授、日本家庭健康プログラムディレクター）　「イフォームドコンセントの新しいあり方－硬膜外麻酔の使用に関する日本人の産科患者との高次の合意の結果について－」("Innovations in Informed Consent: Outcomes of Advanced Consent for Epidural Anesthesia for Japanese Obstetrics Patients")　出産時に実際に自分の意志で合意して硬膜外麻酔を使用した女性に対し、アンケートおよび聞き取り調査を実施します。患者の意見の収集のみならず、医療機関側のスタッフに対しても日本人患者が高次の合意を経て硬膜外麻酔を使用したことをどう思ったか、聞き取り調査を行う予定。

デイメイド・O・フォイギル（生態学・進化生物学準教授）　「遺伝子マーカーを用いて日本産食用軟体動物二種の地球規模の人為的拡散を再構築する」("Reconstructing the Human-Mediated Global Dispersal of Two Japanese Edible Molluscs Using Genetic Markers") 地理的に隔絶したヨーロッパと南北アメリカの軟体動物の個体群が、日本原産の個体群の歴史に記されざる人為的導入に基づくものかどうかを探求します。

阿部マーク・ノーネス（映画研究準教授）　"Forest of Pressure"、"The Translator's Cinema"の2研究に対して授与。"Forest of Pressure" は学生運動の火付け役になった左派映画集団小川プロダクションを取り上げた2冊目の著書。同プロは成田空港建設に反対した三里塚闘争において開花を見、最終的に山形県の山間部のコミューンとして消滅するまで息の長い活動を続けました。"The Translator's Cinema" では翻訳が言語の最前線において果たす根本的役割を分析します。中でも映画祭・国際共同製作・衛星放送・ビジネス契約などの為の、字幕や吹き替え、翻訳などを掘り下げて研究する予定。

レズリー・ピンカス（歴史学準教授）「民主的なコミュニティーを想像し直す－過去の拠り所と今日の課題－」("Re-imagining Democratic Community: Past Sources, Present Struggles")　戦後初期の民主主義的希望を甦らせようという最近の日本の社会運動の研究。それぞれの運動は普通の地域住民のレベルで発生し、高度な規律の伴う現代日本の激しい競争社会の中で活動をしながら、権力の狭間から民主的生活を再現して行こうとするものです。

エリック・サントス（音楽学助教授）「日本における大駱駝館の内側からの研究」("Research in Japan from Inside Dairakudakan")　2002年7月中旬～12月末まで、有名な東京の舞踏集団「大駱駝館」の専属作曲家を担当。大駱駝館で仕事をするアメリカ人としては一人目。同集団の創立者の一人、麿赤兒から直接舞踏を学ぶのみならず、自分の音楽によってこの集団の創造的なプロセスにどんな影響が出るかも観察。

ゲーリー・サクソンハウス（経済学教授）　「日本の労働基準の変化－人権、科学的経営法、そして国際経済衝突－」("The Evolution of Labor Standards in Japan: Human Rights, Scientific Management, and International Economic Conflict")　1880年代半ばから1930年代半ばまでの間に、日本の労働基準がどう変貌を遂げたか、その変貌により労働者の生活の質がどれほど改善したかを解明する研究。

グレッチェン・ウィルキンズ（建築・都市計画学部講師）　「妹島和世（せじまかずよ）－プロセスの翻案－」("Kazuyo Sejima: Translations of Process")　現代日本の住宅に関する研究の続き。国際的に評価の高い、極めてオリジナルな建築家妹島和世の日本国内の作品を掘り下げて研究します。また奨励金の一部は、4月にミシガン大で行われた妹島和世とパートナーの西澤立衛（りゅうえ）によるジョン・ディンケル一記念特別講演を書き起こし、Michigan Architecture Papers のシリーズから出版するプロジェクトにも使われる予定。

日本研究センターでは日本関係の研究に対する奨励金を毎年賞与しています。日本の社会・文化に関係する研究に携わっているミシガン大の教員なら誰でも応募資格があります。賞与金額は$500～$30,000。関心のある方は次回の選考にふるって応募下さい。2003～04年度（2003年夏も含む）の奨励金の応募締切は2003年3月7日です。詳しくは

http://www.umich.edu/~iinet/cjs/funding/funding.html

をご覧下さい。

学生向け

2002 ～ 2003 年度の大学院生向け奨学金受給者は下記の通りです。

夏期FLAS 奨学金: **ヘンリー・アダムス**（アジア言語文化博士課程）、**アレクサンドラ・マオ**（人類学博士課程）、**ジェシカ・モートン**（CJS 修士課程）、**デボラ・ソロモン**（歴史学博士課程）

学年度 FLAS 奨学金: **デイビッド・ヘンリー**（アジア言語文化博士課程）、**ジャン・ルクテンバーガー**（アジア言語文化博士課程）、**ネイサン・スコット**（CJS 修士課程）　FLAS 奨学金は全て米国教育省タイトル VI プログラムからの援助で成り立っています。

「プライズ 賞」奨学金: **嚴昭貞（オム・ソジョン）**（CJS 修士課程）

グッドマン奨学金: **リンジー・カスター**（社会学博士課程）、**エイミー・ストーン**（同）、**マーガレット・スー**（CJS 修士課程）、**クリスティーナ・バシル**（アジア言語文化博士課程）　グッドマン奨学金はミシガン大学日本研究センター並びに歴史学科卒業生のグッドマン教授からの寄付金によるものです。同教授はカンザス大学歴史学名誉教授。

CJS 基金奨学金: **ヘンリー・アダムス**（アジア言語文化博士課程）、**マーニー・アンダーソン**（歴史学博士課程）、**趙　秀美（チョ・スミ）**（人類学博士課程）、**董戈（ドン・グ）**（CJS 修士課程）、**福永玲奈**（CJS 修士課程）、**スコット・コジョラ**（CJS 修士課程・MBA）、**ジャ**

ン・ルクテンバーガー（アジア言語文化博士課程）、**ジェシカ・モートン**（CJS 修士課程）、**ミシェル・プローシェ**（アジア言語文化博士課程）、**マーガレット・スー**（CJS 修士課程）

ラッカム・ブロック奨学金: **福永玲奈**（CJS 修士課程）

イトウ奨学金: **トーマス・ブラックウッド**（社会学博士課程）、**ジェレミー・ロビンソン**（アジア言語文化博士課程）

学生向け奨学金について

以下に記す奨学金については、
http://www.umich.edu/~iinet/cjs/funding/funding/html
のCJS Funding のページをご覧下さい。

・外国語並びに地域研究（FLAS）奨学金　高等教育法のタイトル VI により米国教育省が現代語の学習向けに出している奨学金。締切は2003年2月1日。

詳細は
http://www.umich.edu/~iinet/iisite/pdf/FLAS%20Application%202003-04.pdf
をダウンロードしてご覧下さい。

・日本研究センターには夏期および通年の**基金奨学金**があります。ミシガン大で日本関連の研究をしている博士課程・プロフェショナルスクールの学生と、CJS の修士課程、修士・MBA、修士・J.D. のプログラムに在籍する学生が応募できます。この奨学金は寄付金によるセンター基金でまかなわれています。応募締切は2003年2月1日。

・CJS 学会参加旅費補助金　ミシガン大の日本地域研究専攻生が米国内外の学会に出席し、論文発表をしたりパネルの座長・コメンテーター・学会主催者として参加する場合の旅費援助です。AAS の就職面接などのように、キャリア開拓の場として学会に参加する場合も応募可能。申請締切日は、毎年11月30日、1月31日、3月31日の3回です。

学会案内

2002年9月27～29日
中西部アジア問題学会(Midwest Conference on Asian Affairs) 於ウィッテンバーグ大学（オハイオ州スプリングフィールド）
ウィッテンバーグ大学東アジア研究プログラム主催「第51回中西部アジア問題学会年次総会」。
詳細ウェブサイト
http://www.wittenberg.edu/academics/east/mcaa/index.html。問い合わせ先　MCAA 2002 Program Chair, Wittenberg University, Springfield, OH 45501, (937) 327-7055 または llewis@wittenberg.edu。

2002年10月4～5日
アジア研究大学院生学会(Asian Studies Graduate Conference) 於テキサス大学オースティン校
学問分野や従来のアジア諸国の地理的区分を超えた、独自の研究をしている学生を対象にした意見交換の場。
詳細ウェブサイト
http://asnic.utexas.edu/asnic/das/pages/utascon.html。
問い合わせ先　utascon@uts.cc.utexas.edu。

2002年11月6～9日
国際教育交流審議会 (CIEE) 年次総会 (Council on International Education Exchange [CIEE] Annual Conference) 於ジョージア州アトランタ
「見過ごされてきた人々と地域」("Underrepresented Faces and Nontraditional Places") がテーマ。サブテーマは「国際的教育とメディア」("International Education and the Media.")。海外留学プログラム担当者、教員、大学・短大学長、政府関係者、国際組織代表者が対象。
詳細ウェブサイト
http://www.ciee.org/conference。

2002年11月14～15日
第26回国際日本文学研究集会 (26th International Conference on Japanese Literature in Japan)
国文学研究資料館創立30周年を記念して東京で開催される学会。詳細並びに参加申し込み書（共に日本語）は、深澤ゆりまで。電話 (734) 764-6307 、Eメール yurif@umich.edu 。

2002年12月4～6日
国際シンポジウム　於東京
東京文化財研究所が「動く物体－空間・時間・文脈－」と題して開催する国際シンポジウム。主題は日本美術史。詳細は http://www.tobunken.go.jp をご覧下さい。

お知らせ

ミシガン大学アジア研究専攻プログラム拡充構想

ニューヨークのフリーマン基金からミシガン大アジア専攻学部生向けプログラム拡充構想 (MUASI: Michigan Undergraduate Asian Studies Initiative) に対し、200万ドルを超す援助が授与されました。この構想はミシガン大学の学部レベルにおけるアジア研究の活性化を目指すもので、12の別個のプロジェクトで成り立っています。プロジェクトの担当者は以下の通り。**ジューディス・ベッカー**（音楽学部・東南アジア研究センター）、**ヘンリー・エム**（アジア言語文化・コリア研究プログラム）、**ナンシー・フロリダ**（アジア言語文化・東南アジア研究センター）、**阿部マーク・ノーネス**（アジア言語文化）、**マーティー・パワーズ**（美術史・中国研究センター）、**ゲーリー・サクソンハウス**（経済学科・日本研究センター）、**殿村ひとみ**（歴史学科・日本研究センター）。

MUASIは、学生・教員の海外における同化、カリキュラム開発、専門能力開発、学生向け奨学金、教員雇用の5つの分野に分かれます。学生・教員の海外における同化には北朝鮮の学生向けのプログラム開発も含まれ、ミシガン大学側担当者が北朝鮮へ行く2往復分の旅費と、北朝鮮から招いた学生数名が任意の分野で学ぶための費用を含みます。他に、十分な言語能力を有する学生4人に対し、東南アジアで短期の間、研究調査、非政府組織 (NGO) での研修、ビジネス、のいずれかの機会を提供する費用も含まれ

ます。また、アジア舞台芸能ワークショップもこのカテゴリーに含まれ、アジアの伝統的な舞台芸能の専門家を２人招き、ミシガン大の学部レベルで一年間、演劇ワークショップをすることが可能になります。

カリキュラム開発としては汎アジアコースの開発が挙げられます。また、米国の大学では学部レベルで社会科学の授業にアジアの言語を用いることは殆ど行われていません。MUASI はアジアの言語で書かれた資料を大いに活用するコースを、社会科学系のカリキュラムとして開発する費用を拠出します。中国関係のコース用に、学際的なユニット式教材を開発するプロジェクトも含まれます。主にコースパックの形ないしウェブサイト上で用いられるこの教材は以下の特性を持つことが条件付けられています。ユニット式（モジュラー）であること、簡潔であること、基本事項を中心とすること、国際比較・グローバルな視点を取り入れること、今なぜこの知識が必要なのかを明確にすること。

専門能力開発・リサーチ項目としては、ミシガン大学の語学教員に対する研究奨励金があります。1) ソフトウェア開発・学会参加費用　2)研究休暇の２本立てで、選抜ベースで賞与されます。

学生向け奨学金は、アジア各国からの留学生がミシガン大学で学ぶことと、ミシガン大学生が海外で学ぶことを可能にしてくれます。具体的には、ベトナム・カンボジア・インドネシア・フィリピン・タイからの人文・社会科学履修希望生２名に２年間奨学金を提供するプログラムがあります。更に全米初のチベットで行う夏期講座があります。期間は8週間、10名の学生にチベット語の集中講座、チベット各地の旅行の機会を提供します。またレベルの高い、教室スタイルの講義を通して学生に東アジア・東南アジアの文化を紹介するために、３週間に亘る夏期船上講座「海の上の講座」を提供します。参加学生数１５名、寄港地はシンガポール・バンコック・ホーチミン市・香港・上海・長崎、全員が船上で講義を受け、各寄港地では与えられた課題に関するリサーチをします。

MUASI は朝鮮文学を教える教員(基金教授職ではない)を確保する資金提供もします。現在ミシガン大学には韓国・朝鮮に関して歴史と仏教のコースがありますが、文学のコースが加わることで韓国・朝鮮研究の巾が広がることになります。

ミシガン大学アジア図書館旅費補助金（トラベルグラント）

他大学の日本研究者が本学アジア図書館を利用する際の、旅費、宿泊費、食事代、コピー代に対し、最高 $700 までの旅費補助があります（期間　2002 年 7 月 1 日～ 2003 年 6 月 30 日）。アジア図書館のコレクションは 日中韓図書合わせて 698,072 冊、うち日本コレクションは、図書 269,153 冊、マイクロフィルムが 11,272 リールと 8,058 シートです。最近加わったデジタルリソースとしては、日本の日外データベースへのオンラインアクセスがあります。詳しくは http://asia.lib.umich.edu/index.htm をご覧頂くか、アシスタント（電話 734-764-0406）にお問い合わせ下さい。

補助金希望者はその旨を記した手紙に、研究テーマの簡単な紹介とアジア図書館の利用を希望する理由（250 単語以内）、閲覧を希望するリソースの一覧を添えて、センターへ申請して下さい。尚、最新の履歴書と必要額見積りを添付し、旅行予定日も明記して下さい。

E メールによる申請はumcjs@umich.edu 宛、郵便の場合は

Asia Library Travel Grants
Center for Japanese Studies
Suite 3603, 1080 S. University
The University of Michigan
Ann Arbor, MI 48109-1106

までどうぞ。

近況をお知らせ下さい

日本研究センターでは全ての教職員、関係者、学生、卒業生の皆さんから近況を募集しています。またこのニュースレターが転送されて届いた方、引っ越した方、引っ越す予定である方、定期的にこのニュースレターが届かない方、umcjs@umich.edu までご連絡下さい。

日本研究センター 2002年秋学期催し物カレンダー

8月29日　国際問題研究所オリエンテーション　1636 SSWB、午前8時から。

9月19日　講演「寺田寅彦と非還元的な創造力」マーフィ・ジョセフ（フロリダ大アフリカ・アジア言語文化研究部助教授）
("The Physics of Terada Torahiko and a Non-Reductive Creativity," Joseph Murphy)

20日　映画『Shall We ダンス？』周防正行監督、1996年 カラー118分。

21日　「日本から見た中国」展オープン。於ミシガン大学美術館（UMMA）東洋美術ギャラリー。2003年1月26日まで。

25日　トヨタ招聘客員教授 蒲島郁夫氏レセプション　於CJSオフィス（3603 SSWB）前ロビー。

26日　講演「避妊よりも中絶−戦後の日本における生殖行為の政治学−」ティアナ・ノルグレン（開かれた社会研究所 [Open Society Institute]、産む権利と女性の健康プログラム担当）("Abortion before Birth Control: The Politics of Reproduction in Postwar Japan," Tiana Norgren)

27日　映画『眠る男』小栗康平監督、1996年 カラー103分。

10月3日　講演「日本における国際基準の政治的な再建築−援助交際と児童買売春の場合−」デイビッド・レーニー
（ウィスコンシン大マディソン校政治学部助教授）("Child Prostitution and the Redefinition of Moral Norms in Japanese Politics," David Leheny)

4日　映画『うなぎ』今村昌平監督、1997年 カラー117分。

11日　ロバート・L・ダンリー追悼記念講演　「翻訳事情 ― 日本文学の英訳の理論と実際 ― 」("Translation Matters: Theory and Practice in Translated Japanese Literature")　ダンリー教授のかつての教え子、アン・シェリフ（オベリン大、日本文学）、シャラリン・オルバー（ブリティッシュコロンビア大、日本文学）を迎えて。ミシガンリーグ２階ミシガンルーム、午後4時。

同日　映画『ＣＵＲＥ』黒沢清監督、1997カラー111分。
15日　蒲島郁夫 トヨタ招聘客員教授担当のミニコース「現代日本政治」がスタート。(アジア研究 491・政治学491/691)
17日　講演「宗教儀式にみる『公的記憶』-靖国神社における戦没兵士慰霊祭の場合-」ジョン・ネルソン(サンフランシスコ大 神学・宗教学部助教授)("Social Memory as Moral and Ritual Practice: Commemorating Spirits of the Military Dead at Yasukuni Shinto Shrine," John Nelson)
18日　映画『ＫＡＭＩＫＡＺＥ ＴＡＸＩ』原田眞人監督、1994年 カラー141分。
24日　講演「閾の女の子と閾の世界-現代日本アニメにおける少女の勝利-」スーザン・ネピア(テキサス大日本研究学「三菱基金」学科長)("Liminal Girls and Liminal Worlds: The Triumph of the Shoujo in Contemporary Japanese Animation," Susan Napier)
25日　映画『バウンスkoGALS』原田眞人監督、1997年 カラー109分。

11月1日　映画『失楽園』森田芳光監督、1997年 カラー119分。
7日　講演「原子跡：戦後日本映画と不可視現象」アキラ・水田・リピット(カリフォルニア州立大アーヴァイン校映画研究学部準教授)("An Atomic Trace: Postwar Japanese Cinema and Invisibility," Akira Mizuta Lippit)
8日　映画『金融腐食列島　呪縛』原田眞人監督、1999年 カラー114分。
10日　公開ゼミ　「日本絵画と中国絵画」ジェームズ・ケイヒル(カリフォルニア大バークレー校美術史名誉教授)(Open Seminar on Chinese and Japanese Painting by James Cahill)、タッパンホール、午後2時～4時。
11日　公開ゼミ「日本絵画と中国絵画」ジェームズ・ケイヒル(カリフォルニア大バークレー校美術史名誉教授)(Open Seminar on Chinese and Japanese Painting by James Cahill)、タッパンホール、午後4時～6時。
14日　講演「日本のハイテク産業の再活性化-その障害物と機会-」ロバート・Ｅ・コール(カリフォルニア大バークレー校、経営学・社会学教授)("Restarting Japan's Hi-tech Engine: Obstacles and Opportunities," Robert E. Cole)
15日　映画『赤い橋の下のぬるい水』今村昌平監督、2001年 カラー119分。
21日　講演「幕末期関東における『悪者』対策と暴力」デビッド・ハウエル(プリンストン大東アジア研究学科・史学科準教授)("Chasing Bad Guys in Late Tokugawa Japan," David Howell)
22日　映画『突入せよ！「あさま山荘」事件』原田眞人監督、2002年 カラー133分。

12月5日　講演「国会議員のイデオロギーと日本の政治」蒲島郁夫(東京大法学部教授、ミシガン大学日本研究センタートヨタ招聘客員教授)("Political Ideologies of Japan's National Legislators and their Implications for Contemporary Japanese Politics," Ikuo Kabashima)

2003年冬学期催し物カレンダー

1月16日　講演「日本人の目から見たリドリー・スコット監督『ブレードランナー』」加藤幹郎(京都大総合人間学部助教授、映像表象文化論)("Ridley Scott's 'Blade Runner' Under the Japanese Eyes," Mikiro Kato)
18日　新年餅つき大会
22日　トヨタ招聘客員教授 角田由紀子氏レセプション。於CJSオフィス(3603 SSWB)前ロビー。午後4:30～6:00。
23日　講演「同情の在処と漱石の『趣味の遺伝』」ダニエル・オニール(カリフォルニア大バークレー校東アジア言語文化助教授)("Locating Sympathy and Soseki's Shumi no iden," Daniel O'Neill)
27日　角田由紀子トヨタ招聘客員教授・吉浜美恵子社会福祉学準教授担当のミニコース「日本における対女性暴力・法律・社会政策」がスタート。(アジア研究 491・社会福祉学 733)
30日　講演「現代日本におけるグローバリゼーション、ジェンダー、そして仕事」ハイディ・ゴットフリード(ウェインステート大、労働・大都市問題学部準教授)("Globalization, Gender, and Work in Contemporary Japan," Heidi Gottfried)
31日　CJS 学会参加旅費支援金申請締切、および日本技術管理プログラム(Japan Technology Management) 奨学金・研修申込み締切日。

2月1日　FLAS奨学金応募締切日、ならびにCJS 基金奨学金応募締切日。
6日　講演「戦後の日本と西欧における雅楽の現代音楽への導入」宇野弥生(エモリー大音楽理論準教授)("Poetics of Interculturalism: Gagaku in Postwar Japan," Yayoi Uno Everett)
13日　講演「高陞号の沈没-国際法と外交の適用例-」ダグラス・ホーランド(ウィスコンシン大ミルウォーキー校、歴史学教授)("The Sinking of the SS. Kow-hsing: An Exercise in International Law and Diplomacy," Douglas Howland)
15日　「禅美術」展オープン。ミシガン大美術館。
20日　講演　「今日の沖縄音楽-その帰属は沖縄か日本か世界か-」デイビッド・ヒューズ(ロンドン大、民族音楽学学部長・講師)("Okinawan Music Today: Music of Okinawa, of Japan, or of the World?," David Hughes)

3月6日　講演「服装の記号学-三宅花圃と明治の近代的女性-」レベッカ・コープランド(ワシントン大東アジア研究課長・日本文学準教授)("Sartorial Semiotics: Miyake Kaho and the Modern Meiji Woman," Rebecca Copeland)
7日　CJS 研究奨励金(教員向け)申請締切日。
8日　CJS 外国学会参加旅費補助金(教員向け)申請締切日。
10-16日　映画 "Spotlight on Japan"　「アン・アーバーフィルムフェスティバル」にて。　於ミシガンシアター。
13日　講演「日本の低迷経済の行方」エドワード・J・リンカーン(ブルッキングズ研究所 外交政策研究部シニアフェロー)("Is There Light in Japan's Economic Tunnel?," Edward J. Lincoln)
20日　講演「仏に面と向かう-平安末期の仏像の機能-」サラ・ホートン(マカレスター大 宗教学助教授)("Face to Face with the Buddha: Functions of Buddhist Statues in Early Medieval Japan," Sarah Horton)
24, 25, 26日　「鼓童」公演、午後8:00～　於ミシガンシアター。
27日　講演「最近の日本における女性に対する暴力に反対する女性運動」角田由紀子(2003年度冬学期 CJS トヨタ招聘客員教授)("Contemporary Women's Movements to Stop Domestic Violence in Japan," Yukiko Tsunoda)
31日　CJS 学会参加旅費補助金(学生向け)申請締切日。

4月3日　講演「日本宗教史再考－オウム事件と近代日本の盲人文化－」広瀬浩二郎(国立民族学博物館 民族文化研究部助手、プリンストン大 東洋学部客員研究員)("Reconsidering Japanese Religious History: The Aum Incident and Blind Culture in Modern Japan," Kojiro Hirose)
9日　演奏会「マタイ受難曲」バッハコレギウム・ジャパン、午後7:30～　於アッシジの聖フランシスコカトリック教会(St. Francis of Assisi Catholic Church)
10日　講演「『鎖国』と船の図像学」タイモン・スクリーチ(ロンドン大アジア・アフリカ研究学院教授)("Strange Vessels: 'National Isolation' and Ship Iconography in Edo Japan," Timon Screech)

・講演は注記のない限り全て、SSWB 1636号室にて正午から。尚、講演会は一部米国教育省タイトル VI 研究助成金により実現しています。
・催し物の最新情報は、CJSのイベントカレンダー (http://www.umich.edu/~iinet/cjs/events/CJSevents.html)でご確認下さい。

Regents of the University of Michigan: David A. Brandon, Laurence B. Deitch, Bloomfield Hills; Daniel D. Horning, Grand Haven; Olivia P. Maynard, Goodrich; Rebecca McGowan Ann Arbor; Andrea Fischer Newman, Ann Arbor; S. Martin Taylor, Grosse Pointe Farms; Katherine E. White, Ann Arbor.

The University of Michigan, as an equal opportunity/affirmative action employer, complies with all applicable federal and state laws regarding nondiscrimination and affirmative action, including Title IX of the Education Amendments of 1972 and Section 504 of the Rehabilitation Act of 1973. The University of Michigan is committed to a policy of nondiscrimination and equal opportunity for all persons regardless of race, sex, color, religion, creed, national origin or ancestry, age, marital status, sexual orientation, disability, or Vietnam-era veteran status in employment, educational programs and activities, and admissions. Inquiries or complains may be addressed to the University' s Director of Affirmative Action and Title IX/Section 504 Coordinator, 4005 Wolverine Tower, Ann Arbor, Michigan 48109-1281, (734) 763-0235, TDD (734) 647-1388. For other University of Michigan information call (734) 764-1817.

所長： ジョン・リー
プログラム・アソシエート： エイミー・キャリー
アドミニストラティブ・アシスタント： 深澤ゆり
学務アシスタント： メアリエレン・バートロメ
学生アシスタント： ジェニファー・チョン、出田真澄

出版会
総編集長： ブルース・ウィロビー
副編集長： ロバート・モーリー
デザイン・イラスト・レイアウト： S^2デザイン
翻訳： 渡辺 康雄

Center for Japanese Studies
University of Michigan
Suite 3603, 1080 S. University
Ann Arbor, MI 48109-1106

電話： 734-764-6307
ファックス： 734-936-2948
Eメール： umcjs@umich.edu
ウェブサイト：http://www.umich.edu/~iinet/cjs

Center for Japanese Studies

University of Michigan
Suite 3603, 1080 S. University
Ann Arbor, MI 48109-1106